

!!! 今月の SpotLIGHT

嘉手納基地で働く様々な職種の日本人従業員にスポットをあてて紹介していくコーナーです。今回はこの方にお話をうかがいました。



KEN KINJO

第18航空医療中隊 生物環境工学部
きんじょうけん
生物環境工学専門職 金城 健さん

Q1. あなたの職種と仕事内容をお聞かせ下さい。

生物環境工学専門職です。この職種は海兵隊など他の軍には無く、また日本政府機関やその他の民間機関にもこのような職種はないと言っています。米国空軍独特の職種ということで、世界中の米国空軍基地にあり、在日空軍で言えば、横田基地、三沢基地そして、ここ嘉手納基地にあります。横田基地と三沢基地にも私と同じ職種の日本人従業員が各々2人配置され、嘉手納基地の方が規模は大きいのですが、ここでは私1人です。1980年代後半にあった米国空軍再編成で、それまで医療群の公衆衛生部の一部だった部署が、生物環境工学部として独立しました。

この職場を簡単に言えば、日本の厚生労働省の労働基準監督署と環境省が一つになったようなところで、部内では労働衛生部門と環境衛生部門の2部門に分かれています。この職場の主な仕事には、嘉手納基地内とその他の在沖米軍基地の住宅地に流れる水道水を検査することなどがあります。在日米軍基地環境基準に沿って、大腸菌などがいないかどうか、毎週各基地の検査ポイントに行き検査をしています。また、放射線安全管理もこの部の主な仕事の一つです。通常の仕事内容の1つには、嘉手納基地にある航空機の金属疲労を確認する放射線検査をする際の事前承認などです。私たちの部署の承認がなくては検査が出来ないようになっています。余談ですが、大震災の2週間後には、この職場から専門兵8人が横田基地に出向き、福島県やその近隣地域から支援活動を終え横田基地に戻ってきた航空機や人員の放射線汚染測定作業を航空機が到着する滑走路内で毎日行うなど、5月末まで横田基地に滞在し、トモダチ作戦に参加していました。

私は2つある部門のうち環境衛生部門に属していますが、部長直属のアシスタントということで、この部署全体の連絡調整官として、嘉手納基地内の他の部隊をはじめ、国や県、また近隣市町村との連絡調整役をしています。

また、労働衛生や環境衛生に関する様々なプログラムがあり、空軍兵1人1人が専門家として各自いくつかのプログラムを担当していますが、私も同様にプログラムを任せられています。主にアスベストによる健康被害防止プログラムと、鉛入りペイントを検査をするプログラムを担当しています。例えば、アスベスト関連では、請負事業者に発注する前の基地内施設改築工事の設計図面が届き、改築工事予定施設にアスベストが含まれているかどうかを既存データを使い確認します。

アスベストがあると判断された場合は、アスベスト取扱資格を持っている業者に依頼し、先に検査をするように指導したりします。また、アスベスト除去工事の場合には、請負業者が適切なアスベスト取扱資格を保持しているかどうかの確認もします。この確認作業は環境衛生に関するいくつかの規則に基づいて確認していきます。その際には規則の厳しいほうに準じた確認・指導を行います。また、米国環境保護庁の資格である、アスベスト検査官認定資格を保持している従業員が行う必要がありますが、現在資格保有者は私1人です。この資格は免許継続のために年に1度再訓練講座を受けなければなりません。





Q4. どういう点に仕事のやりがいがありますか？

健康に関して直接的な調整をし、生活環境と労働環境の安全を守るということが、そこに住んでる人、または働いている人たちを健康被害から守り、助けることが出来るということです。健康被害事故がないことがもちろん1番いいことなので、例えば先ほどお話した、改築前設計図を確認することなどによって、居住者や工事に関わる業者の方々の健康を害する物質や状態への接触を未然に防止できることなどです。

Q5. この仕事の大変さについて。

年々、規則の内容が変わっていますので、更新内容についていくためにも勉強を続けなければなりません。また、様々な機関との兼ね合いがあり、調整には苦慮することもあります。そのほかには、人員の増員と予算増加ができれば、任されているプログラムを更に充実させ、敏速に対応することが出来るのにと感じています。

Q6. アメリカ人と働く環境での一番の課題は何ですか？

基地内の日本人従業員がいる職場では、習慣 文化の違い、仕事の仕方の違いなどを皆さん感じていると思います。仕事をする上で意見が合わないことも、もちろんありますですがその場合は何故合わないのか丁寧に説明するように心がけています。また、こちら側も米国の習慣を受け入れ、ハッキリ伝えないといけないときは、ハッキリ伝えるようにしています。その時には、自信を持って説明が出来ないといけないと思います。このような違いはありますが、これまで上司・同僚には恵まれていています。この職場の空軍兵は皆さん優しくて、よく話を聞いてくれます。上下関係や同僚同士の横の関係に大きな問題もありませんし、同じ職場で長年勤められたのは、やはり良い同僚にかこまれていたからだと思っています。

Q7. 同じような職種に就こうと考えている方へのアドバイスは？

規則や技術的なことは絶えず進歩していますので、日々勉強を続けなければなりません。英語に関しても、ある程度の会話が出来ること、英語で書かれた規則を理解できることが必要だと思います。英語がある程度できたとしても、化学や生物学の専門用語がたくさんでてきますし、規則を読めても経験やトレーニングを積んで徐々に分かってくることもあります。これらの勉強を続けられるという方がいいと思います。また、生物学や化学を専攻した方やそれに関連した経歴は、やはりプラスになります。知識や経験のあることで、仕事が覚えやすくなるのでいいと思います。

Q2. 職場のスタッフ構成は？

空軍兵22人、米国企業との米国人契約職員1人、そして日本人従業員2人です。

Q3. この職場に勤めてどのくらいですか？

20年目です。SpotLIGHT! KINJO-san!



18 AMDS/SGPB

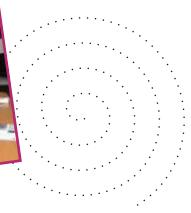
SpotLIGHT!

SpotLIGHT! SpotLIGHT!
SpotLIGHT! SpotLIGHT! SpotLIGHT!

!!! 今月の SpotLIGHT

沖縄市の専門学生、嘉手納基地で就業体験

第18航空団広報局



INTERNSHIP/SHADOW PROGRAM



(米空軍：ブルーク・ピアーズ上等兵撮影)



(米空軍：ブルーク・ピアーズ上等兵撮影)



(米空軍：ブルーク・ピアーズ上等兵撮影)

専門学校日経ビジネスと沖縄情報経理専門学校の学生計25名は、2012年1月17日から27日の9日間、嘉手納基地の様々な事務所や施設で、初めての就業体験に参加しました。学校での授業も半日受けながら、学生達は1日4時間、嘉手納基地内のティーンセンター、ライズナーハイスクール、シリング・コミュニティーセンター、広報局などで接客業務を中心に研修を受けました。今回参加した学生の多くは、2月初旬からオーストラリアへ語学研修も控えているとのことです。その海外研修出発を前に実施された就業体験は、英語環境の中で接客業務を通して言語を学び、米国スタイルのビジネスや米国文化を習得することを目的とし行われました。

エアマン&ファミリーレディネスセンターで就業体験に参加した沖縄情報経理専門学校のホカマ・ナタリアさんは、接客や空軍兵やその家族へ配布するクーポンの仕分けを手伝ったりと、事務職にも携わりました。ホカマさんは「はじめはとても英語を理解することが難しかったのですが、周りの方々がインターンの私を忍耐強く教えてくれたので、日を追う度に理解することができるようになりました。」と感想を述べています。

日経ビジネスから参加した比嘉優香さんは広報局で働き、フォトジャーナリストのウイリアムソン上等兵からインタビューの質問の方法などを教わりました。模擬インタビューをビデオ撮影したり、またインタビューを受ける側になって受け答えを練習しました。この就業体験期間、学生達はそれぞれの職場で英語技能だけでなく様々な体験をしたようです。嘉手納基地の隊員や職員も学生達との関わりを通して、協力して働くことや忍耐を持って教える事の大切さなど、社会の中の個人を見つめる機会にもなったようです。



(写真指定全て、嘉手納基地広報局写真部：金城順子撮影)



現役高校生、デリースが教えてくれる
嘉手納基地内学校情報あれこれ

PART I

嘉手納基地広報局インターン生
嘉手納ハイスクール2年 デリース・ダニエルズ訳・編集

HELLO!

家庭教師ボランティアについて

「塾」や「家庭教師」という言葉は、日本人には聞きなれたものかもしれません、アメリカ人にはあまりなじみのない言葉です。アメリカンスクールに通う生徒たちは放課後、自主的に集まり各自で勉強会を開き、試験に備えています。宿題が主な成績となり、試験は前期と後期に分かれて行われます。小テストやクイズなども定期的にありますが、成績にはあまり影響はありません。

『勉強会だけでは足りない!』と言う生徒達の声に応えるため、各学校では勉強を教えてくれる米国民間人や空軍兵を家庭教師ボランティアとして募集するプログラムがあり、ここ数年、このプログラムが主流になりつつあります。カデナ基地ホームページの、誰でも閲覧出来る「掲示板」で、家庭教師ボランティアを募っています。

カデナハイスクールでは、毎週月曜日と水曜日に空軍兵がボランティアとして学校の図書館にやって来て、生徒達の宿題や試験勉強の手助けをしてくれます。第18航空団指揮所勤務のポール・グレゴリー大尉も掲示板を見てボランティアとなつた1人で、カデナハイスクールで生徒たちの勉強の手助けをしてくれています。グレゴリー大尉は、数学、理科、物理など理数系が得意で、とても頼りになるボランティアです。



高校生ら、米国議会の模擬体験inシンガポール



2012年1月13日から15日にかけてシンガポールで開催された、ハーバード大学主催の『米国連邦議会擬似会議 アジア』に、嘉手納基地にあるカデナハイスクールから10人の生徒たちが参加しました。

シンガポール、韓国、香港、インド、グアム、インドネシア、フィリピン、日本などのアジア各国から300人以上の生徒たちが議会の議員役となるため参加しました。この擬似議会の目的は、ハーバード大学指導の下、米国議会の機能を学習することでした。参加した高校生たちは、各々事前に割り当てられた議員について調べ、擬似議会ではその議員の役を務め、最新のニュース、外交、核兵器等、多くのことについて議論しました。

See you next!

嘉手納基地は一つの町として機能していると言っても過言ではありませんが、基地内には米国国防省立の教育機関である小学校4校、中学校2校、高校1校があり、軍人・軍属の子ども達が通学しています。

今月は、4校ある小学校の1つ、『ボブ・ホープ小学校』を紹介します。

学校名	ボブ・ホープ小学校
創立年	1980年
校長	ジム・ジャーニー氏
教頭	ルールダス・ジラード女史
在校生徒数	約650人（2012年1月現在）
マスコット	パンダ
モットー	パンダプライド（マスコットのパンダにちなんで、『ボブ・ホープ小学校の児童である誇りを持って』という意味）
スクールカラー	赤、白、黒

"PANDA PRIDE!"

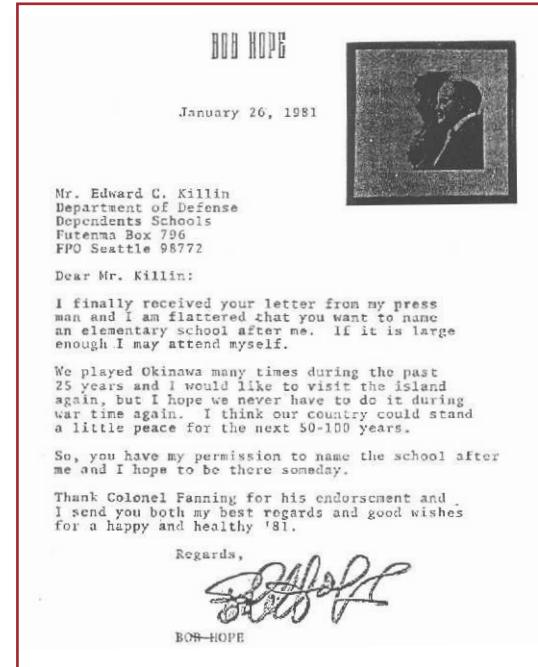


ボブ・ホープ小学校の特徴は、就学前児童（幼稚園児）から低学年児童（小学校3年生）までが通う、沖縄にある国防省立教育機関において唯一の低学年のみの初等教育機関です。

ボブ・ホープという名前を聞いて、ピンッと来る人もいるかもしれません、ボブ・ホープ氏は米国を代表するコメディアンで、第2次世界大戦時から60年間に亘り熱心に軍人慰問活動をしたエンターテイナーとして有名です。彼の名前がこの小学校の名前となったのは、児童たちの投票によるものだそうで、圧倒的多数で「ボブ・ホープ」の名が選ばれたということです。

ボブ・ホープ氏自身がこの学校に来ることはありませんでしたが、彼の名前の使用許可を伝える手紙を学校に送っています。

ボブ・ホープ氏からの手紙



教育方針

国防省立教育機関に在籍する全ての児童たちが、ダイナミックで、グローバルな環境の中で将来成功を収められるよう希望を与え、それに備えられる教育をする。

指導方針

学業を日常生活に結びつけること、言語能力で問題を解決し、人間関係を築くこと、そして、教育が前向きな将来への鍵であると見なす。

展望

児童たちが自立した生涯学習者になること、グローバル社会の中で生産的市民になることを促す。

Bob Hope Primary School

